

## 博士学位論文審査報告

題目	近世開版古往来の研究－『新撰遊覚往来』をめぐる－		
氏名	具香 （学籍番号 211K4101）		
論文審査委員	主査	江藤茂博	本学文学部教授
	副査	森野崇	本学文学部教授
	副査	木村義之	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授
	副査	家井眞	本学文学部教授

### 論文内容の要旨

近世に入ってその内容が多様化していく往来物のなかで、具香「近世開版古往来の研究－『新撰遊覚往来』をめぐる－」では、「庭訓往来系統」として位置づけられた『新撰遊覚往来』を主たる研究対象としている。その諸本に見られる語彙の特徴、語彙の使用頻度による内容の変化の調査分析と、『異制庭訓往来』との比較による両書の内容をめぐる結びつきの深さに関する「緊密度」および両書の構成要素に関する「類似度」を検証し、さらに『庭訓往来』『異制庭訓往来』『新撰類聚往来』との比較考察による「語彙使用の実態」を検証する。そのことで近世に版本として流通した往来物の実態を論証すること、さらに背景である近世の教育文化についての様相を手に入れることが本論文の目的となっている。

本論の構成は以下の通りである。

### 目次

#### 序章

一、本研究の目的と意義	1
二、「往来物」に関する先行研究	3
三、研究方法と論文の構成	4

第一章 往来物の誕生と諸相	
一、往来物とは	6
二、往来物の性格について	7
三、本稿で扱う「庭訓往来型」と先行研究における「古往来」の分類について	8
四、本稿で扱う「庭訓往来型」と近世出版の「古往来」について	14
第二章 『新撰遊覚往来』考	
第一節 『新撰遊覚往来』の諸相	17
一、『新撰遊覚往来』とは	17
二、『新撰遊覚往来』の諸本の紹介	17
三、『新撰遊覚往来』の書名	19
第二節 『新撰遊覚往来』の本文の比較	26
一、古写本と版本の比較	29
二、近世刊本と近代写本の異同	29
三、諸本に見られる日付の異同	36
第三節 『新撰遊覚往来』に見る増補について	50
一、寛文本と謙堂本の分量について	54
二、諸本の分量についての比較	58
三、諸本の分量の統計	64
第四節 『新撰遊覚往来』の誤写・誤刻現象について	69
一、誤刻箇所分析	69
二、誤刻箇所の統計	95
第五節 『新撰遊覚往来』の特殊な語彙について	98
一、特殊の表記	98
二、「鬱」を構成要素とする用語	108
第六節 『新撰遊覚往来』における漢字表記について	111
一、寛文本と謙堂本の漢字表記の異同箇所	111
二、諸本の漢字表記の比較	129
三、諸本の漢字表記の性格	135
第七節 傍訓からみた『新撰遊覚往来』	140
一、読みの異同箇所の分析	140
二、異同箇所の統計	153
第三章 『新撰遊覚往来』と『異制庭訓往来』の比較	

第一節 『異制庭訓往来』について	156
第二節 二種の往来に見られる親子関係	159
一、構成面の類似性	159
二、集团的に列举した重要語彙	162
三、文章上の相似点	164
四、月排列の順序	169
第四章 庭訓往来型往来の比較	
第一節 庭訓往来型往来とは	173
第二節 庭訓往来型往来の語彙について	174
一、語彙の種類	174
二、語彙数の統計	178
第三節 庭訓往来型往来の特徴	183
一、書名の繋がり	183
二、庭訓往来型往来の共通点	184
三、各々の特殊性	187
終章	
一、本稿の調査結果	188
二、『新撰遊覚往来』の諸本の系統関係	189
三、『新撰遊覚往来』の性格	192
四、庭訓往来型往来の位置付け	196
五、残された課題	198
参考文献	204
本稿の資料編 1 （『新撰遊覚往来』の寛文本の翻字本文）	
本稿の資料編 2 （『新撰遊覚往来』の寛文本と謙堂本の異同箇所の一覧）	
初出一覧	

「第一章 往来物の誕生と諸相」では、石川謙や石川松太郎そして三保サト子の先行研究で示された「古往来」の翻刻・評価・分類等に従いながら、「往来物」総体の庶民教育における影響力の高さを確認している。さらに書簡形式で語彙や知識の習得を目的とする「庭訓往来型往来」が、版が重ねられたその内実として、「尚古主義・規範意識」があつ

たことも指摘する。その結果、「庭訓往來型」が「古往來」から「近世往來」への「橋渡し」としての役割を果たしていることの重要性をここでは確認している。

「第二章 『新撰遊覚往來』考」では、『新撰遊覚往來』の諸本を取り上げ、書名・構成・内容等について紹介、本文の比較を詳細に行っている。さらに、古写本と版本の『新撰遊覚往來』の増補の有無等といった本文の異同に関して検証し、その文化的背景を考察している。ここでは、諸本の関係及び増補による新しい時代の要求に適応していく『新撰遊覚往來』の教科書としての性格が明らかになった。さらに具体的には、教科書としての『新撰遊覚往來』の性格を把握するために、『新撰遊覚往來』に見られる誤写・誤刻現象の諸本における実態を調査している。そこから、「誤刻箇所の原型を推測し、ひいては江戸期の版本と原型との違いや誤刻が生じた理由」を考察している。また、『新撰遊覚往來』の特殊な語彙や漢字表記の多様性に注目し、漢字表記の変遷過程を詳しく分析している。そこでは、『運歩色葉集』『恵空編節用集』『下学集』『書言字考節用集』『女節用集文字義』などの古辞書類と照合し、その表記の性格を調べ、「音読みが好まれた」当時の「新しい読者の誕生、読者層の拡大」に重なる表記意識の一端を明らかにした。さらに、傍訓から見た『新撰遊覚往來』として、寛文本の総ルビと、諸本九本の傍訓とを比較分析し、江戸期の刊本の漢文の読まれ方をも明確にしている。

「第三章 『新撰遊覚往來』と『異制庭訓往來』の比較」では、多くの共通する題材、部門、語群を内包し、きわめて近い関係にあるとされる南北朝期のこの二つの「往來物」を比較する。具体的には、二種の往來に見出される、①文章中の語の列挙の仕方などの構成上の類似性、②集団的に列挙した重要語彙の数、③語の列挙部分に見られる文章上の相似点、④往復書簡の月配列の順序、の四点に関して比較調査を行っている。そのことで、「『新撰遊覚往來』を母胎としてそこから『異制庭訓往來』が生まれ出たことを証明」している。

「第四章 庭訓往來型往來物について」では、再度「この型の往來物は古往來の消息文体の形を取りながら、単語と百科的知識とを教えるのが主意の教科書」と確認して、五種の「庭訓往來型往來物」を指摘し、そこから『快言抄』を除く『新撰遊覚往來』『異制庭訓往來』『庭訓往來』『新撰類聚往來』の四つを取り上げ、表題、語彙、語彙数、編纂方式等の多くの共通性とそれぞれの特徴について調査分析している。この比較のための分類、「仏教」「文学」「教養」「衣食住」「漢学」「職分職業」「武具」「人倫」「神祇」「地名」「自然」「雑」「その他」という区分は、先行する石川謙の語彙分類に従っている。そこから、「庭訓往來型往來物」については「衣食住に関する語彙が圧倒的に多い」こと、近世に出版された「古往來物」として、「実生活の基盤」となる知識が当時の教科書として求められていたことを明らかにしている。

特に「資料編」として、「寛文二年刊行本の翻字本文」と「謙堂文庫本と寛文二年本との異同箇所の一覧」が付されていて、今後の「往来物」研究の基礎資料として広く研究者がこの「資料」を活用することになるだろう。

本論文では、『新撰遊覚往来』を主な研究対象とし、先行研究と資料調査を丹念に重ねることで、構成や内容の増補および使用語彙やその表記などに関する多角的な調査と分析が行われることになった。その結果、『新撰遊覚往来』の特徴である表記の多様さが改めて認識でき、当時の庶民の表記意識のありようといったものにまで迫り得ている。また、『異制庭訓往来』『庭訓往来』『新撰類聚往来』などの中世から近世に版が重ねられた「庭訓往来型」に見られる「規範意識の強さ」という特徴についても、丹念な比較分析によって明示している。さらに、こうした近世の「古往来」のテキストの諸相だけでなく、その異本流通によって江戸期の教育の実態にも言及することができている。

### 論文審査の結果の要旨

論文「近世開版古往来の研究—『新撰遊覚往来』をめぐって—」は、その核となる部分としては、「近世古往来物」のうち『新撰遊覚往来』を取り上げて、その諸本の比較検証、内容増補の有無、誤写・誤刻現象、語彙・表記の異同、漢字表記の多様性などを丹念に調査分析した論考である。その方法は、広く教育史的な視座に加えて、語彙の計量的な分析によって、教科書としての機能を明らかにしようとした、国語教育の立場からの論という点に特色がある。

まず「庭訓往来型往来」に研究の焦点を絞っているが、これはこの往来の代表的な作品『庭訓往来』に関する研究はすでに構築されており、論者はそれら先行研究の成果を十分に踏まえたうえで、これまで言及されることのなかった同往来系列の『新撰遊覚往来』に注目したのである。

具体的には、『庭訓往来』研究の構成や内容による諸本の分類という分析方法に重ねながら、『新撰遊覚往来』の「構成・内容・諸本」の紹介と分類から始めている。特に伝本の十五冊を、「古写本」「近世刊行本」「近世・近代写本」に分けて紹介し、研究の前提となるテキストを全て用意するという周到さで分析に臨んでいる研究姿勢は高く評価したい。

特に『新撰遊覚往来』本文の比較として、古写本の「謙堂本」と寛文年間版本の「安田本」を取り上げている。この分析に関しても、「寛文本」の「翻字本文」を作成、さらに異同箇所一覧も作成して、資料編に置いている。この翻刻作業は、論の前提となる作業であり、また基本的な資料としての価値も高い。そうした作業を踏まえて、古写本と版本の二つの「系」の比較という目論みを持つことで、二つのテキストの異同を論者は確認している。さらにその結果として、寛文年間版本「安田本」の「誤刻の多さ」を指摘しながら、諸本におけるそれらの「誤刻」箇所の異同を根拠に、諸本相互の関係を「推測」している。

また、『新撰遊覚往来』への視点として、『異制庭訓往来』との構成および語彙の比較、文章の比較という実証的な作業によって、この二つの「往来物」の関係が、『新撰遊覚往来』から新しい『異制庭訓往来』が生まれた」と推論していく論証性にも一定の評価が与えられた。

さらに実証的な作業の構築は、審査員が同じく評価するところで、『新撰遊覚往来』『異制庭訓往来』『庭訓往来』『新撰類聚往来』との「部門別の語彙」の比較は、さらに論者の丁寧な実証的研究態度を示すものと言えるだろう。

この論考だけで、近世の教育文化が明瞭化されるとはいえないが、そこに向けての労力は示されている。また、そうした問題意識への第一歩として、本論は価値を持つものである。特に、資料による論証への努力は、今後の研究者が参考にすべきものが見られ、審査員が共通して評価した点である。

以上のように、「古往来物」の研究として新しい視点を提出し、さらに論者が意識した往来物の変容過程の一部を明らかにし、研究に新たな知見を提出した意義を、審査員は一致して認め、「博士（文学）」（甲）の学位授与に値するものと認める。